

研究ノート

## 百花斉放・百家争鳴期の社会学者の 発言に対する反右派闘争での批判 (2)

星 明

〔抄 録〕

この小論は本論集の前号74号(2022.3)の「百花斉放・百家争鳴期の社会学者の発言に対する反右派闘争での批判(1)」の続編であり、百花斉放・百家争鳴期の社会学者の発言が、知識人の共産党に対する批判を徹底的に弾圧した政治運動である反右派闘争でどのように批判されたかをみたものである。

その批判の要点は社会学の復活を提言する人びとに対して反共産党、反社会主義、反人民、反ソ連、反マルクス=レーニン主義であること、帝国主義と封建主義に奉仕していることなどであることが明らかになった。

キーワード：中国社会学史、百花斉放、百家争鳴、反右派闘争、ブルジョア社会学

### 1. 百花斉放・百家争鳴の提唱(1956.4-1957.5)と 反右派闘争(1957.5-1958.8)(74号に掲載)

### 2. 社会学者に対する反右派闘争期の批判の言説(前号の続き)

5. 馬寅初「我控訴費孝通」(わたしは費孝通を告発する)、科学出版社編輯部、1958、『反对資産階級社会科学復活(第二輯)』(中国科学院招開の社会科学界反右派斗争座談会發言集)、科学出版社、pp.259-260。
6. 林耀華「費孝通的資産階級社会学是一些什么貨色」(費孝通のブルジョア社会学はどのような代物か)、同上、pp.523-530。
7. 周叔蓮「費孝通是怎样調查開弦弓村的?」(費孝通は開弦弓村をどのように調査したか)、同上、pp.557-563。

8. 許征帆「呉景超搞社会学的目的是為反動勢力効勞」(呉景超が社会学をやる目的は反動勢力のために尽力することである), 同上, pp.568-584。

以下, 順にみていきたい。

5. 馬寅初「わたしは費孝通を告発する」

わたしの意見はすでに書きあげ, 新聞に送って掲載される予定であるので(すでに1957年10月3日付けの文匯報に掲載済), 今日では話さないで, ただ告発するだけである。わたしが告発しようするのは費孝通である。かれの最後の自白のなかに「馬寅初学長は旧社会学の研究所を科学院に置くことに反対である……」ということばがある。このことばはまるでかれの旧社会学の復活にわたしも参加しているが, 旧社会学の研究所を科学院に置くことには反対であるとあらわしているようである。そのことばは二つの悪質なペテンを含んでいる。一つはわたしを悪事に引きずり込むことであり, 二つは挑発することである。したがって, わたしはここで説明をする必要がある。かれの自白は最後までやはり陰険で悪辣であるし, ほかのひとはかれのことを毒蛇(人民に害を与える暴虐な悪人の喩)という。わたしはかれを狂犬と呼ぶが, この狂犬はわたしを噛めない。事情は次のようである。

毛主席が懐仁堂で人民内部の矛盾問題の解決について発言してから, 多くのひとの発言があった。李濟深, 程潜, 黄炎培, 郭沫若といった諸氏はみな発言したが, わたしもそのなかの一人である。毛主席が矛盾問題を説明した時, 人口問題に話が及んだので, わたしも人口問題を話した。わたしが話した後, 陳達先生が駆け寄ってきて, 「あなたは人口問題を研究している, わたしたちのなんにんかも人口問題を研究している, 一緒に協力しましょう」といった。かれはその時グループにはどのような人たちいるかも教えてくれなかったし, かれらの人口問題もわたしにみせなかった。内容が一体どんなものかもわたしに伝えていない。さらに, その時, だれもかれらが右派分子であることを知らなかった。わたしはかれにわたしの人口問題は研究の問題ではなく, まさに実践の問題であり, 科学院には置くことができないので, 実践の問題は国務院に置くべきだといった。わたしは人口論のなかで, 人口を抑制することを主張した。抑制は実践の問題であり, 必ず国務院に置くべきで, 研究しながら抑制することもできるので, 科学院に置く必要がない。これはわたしが陳達に話したことであり, 話したのは人口問題であり, 決して旧社会学の復活の問題ではない, この違いは大きい。わたしは現有の5億の農民の労働生産率を高め, それによってかれらの物質のおよび文化的生活レベルを高めることができるように, 出生人口を抑制することを主張した。かれらは疫病, 飢え, 戦争でいまある人口は減少し, 中国の人口は2億まで減少すると主張した(たとえば, 呉景超)。かれらは中国の農民の貧困の原因は人口が余りにも多すぎることにあるので, 人口の一部分を減らさなければならないと思っている。これはわたしの現在の

農民の労働生産率を高める主張とまったく異なっており、どうして協力できようか（わたしの新人口論<sup>(1)</sup>は1957年7月5日の人民日報に掲載）。現在、費孝通は無理やりわたしを引き込もうとしているが、あれこれ謀略をめぐらしても事態はまずくなる一方である。

出典：馬寅初「わたしは費孝通を告発する」、上掲、pp.259-260。

うえの論考で、馬寅初は旧社会学を復活させること、旧社会学の研究所を科学院へ設置することおよび人口研究の機関を科学院に設置することに反対している。馬は、人口問題は研究の問題ではなく、むしろ実践の問題であるので、科学院ではなく國務院に置くべきだという。また、人口抑制の方法については呉景超の考えを否定している。馬の基本的な主張は、注1にも記載したように取りも直さず中国の人口抑制である。これは毛沢東のひとの多いことは武器となるという「人口資本論」とは真っ向から対立するがゆえに、1957年に右派分子とされ、1958年の大躍進以後から1979年の国家政策としての一人っ子政策の直前まで、馬は不遇な時期をすごした。1979年4月名誉回復。

馬寅初（1882-1982）は北洋大学（現在の天津大学）を卒業後、1907年にアメリカに渡り、1910年にエール大学で経済学修士、続いて1914年にコロンビア大学で経済学博士を取得した。1915年に帰国後、蔡元培に請われて北京大学教授に就く。その後、浙江大学長、中央大学（現在の南京大学）などの教授を歴任し、国民政府の立法委員に就いている。共和国成立後、北京大学長に就任している<sup>(2)</sup>。

主要著書に『中国国外匯兌』（1933）、『資本主義發展史』（1934）、『中国經濟改造』（1935）、『経済学概論』（1943）、『馬寅初戦時經濟論文集』（1945）、『財政学與中国財政』（1948）、『我的經濟理論哲学思想和政治立場』（1958）、『新人口論』（1979）、『通貨新論』（1999）、『馬寅初演講集－第一集－第四集』（2014）などがある<sup>(3)</sup>。

## 6. 林耀華「費孝通のブルジョア社会学はどのような代物か」

わたしの発言はかつて陳永齡、瀋家駒の二人の同志に求めた意見であり、3人の共同発言といえる。

まず、われわれは右派分子のいわゆる自白はたいへん不誠実であると指摘しなければならない。かれらはまじめに自白しなければならず、とくにそのなかの政治的陰謀の部分である。右派の中心人物の費孝通を例にすると、かれは多くのレッテルを貼られたが、具体的な内容が欠けており、語った内容はすでに暴露されたものである。費孝通は陳達、李景漢と以前からライバルであり、互いに軽蔑し合っていたけれども、近年費孝通はなんと「憎しみを水に流した」。というのも、ブルジョア社会学の復活のために、これらの右派分子と一緒に丸め込み、また過去にかれを不満に思っていたひと（たとえば、経済学界の右派分子陳振

漢), かれが軽蔑していたひとでさえも, 至るところで抱き込んだ。これは明らかに右派の政治勢力を拡大するためである。われわれは呉景超, 潘光旦, 呉文藻の「自白」についても極めて不満である。呉文藻についていえば, かれは昨年の科学計画に関する座談会で社会学の問題を提起した。今年, 百花齊放・百家争鳴の整風の機会を利用し, 酷く悪辣に党と社会主義を攻撃した。中央民族学院で民主党派の連合会の結成を積極的に計画し, 党の指導権を奪い取ることを企んだし, かつまた党は文教事業を指導できないと激しくわめきたてた。呉はまたなにか「有益なもの」を講じたいと学生たちに広く告げた。この「有益なもの」とは一体なにか。もちろん, かれが片時も忘れられないブルジョア社会学である。かれは明らかに學術討論, 百家争鳴の機会にかこつけて, 党と社会主義に不満と敵視をまき散らした。潘光旦も呉と同じく大学の教壇を利用し, ブルジョアの反動的社会学を宣伝し, 社会のいくつかの欠点を拡大・歪曲し, 社会主義社会のひととひとの関係は協調がないという謬論をまき散らして, 党と人民への攻撃の手段とした。青年学生をかれらと同じように党を敵視し, 社会主義を敵視する右派分子に養成することを企て, そして資本主義の復活を進めた。これは生死をかけた闘争であり, わたしたちは右派分子が御茶を濁してごまかしてとおりすぎることを許さないし, さらに呉景超らの右派分子が厳粛な教壇で中傷を行なうことも許さない。かれらは党の百家争鳴の政策を悪辣に利用し, かれらの罪業の活動を隠し, この世間の耳目を乱す詭計を弄するが, 必ず暴露しなければならない。

ブルジョア社会学の弊害はとても奥が深い。われわれはブルジョア社会学の完成品であり, 右派分子呉文藻, 潘光旦が誇る自慢の弟子の費孝通を例として, ブルジョア社会学がどのような代物であるかをみることができる。

ブルジョア社会科学を回復させることは, 資本主義の復活の陰謀を企む章羅聯盟の重要な部分であり, 費孝通は積極的な計画者および組織者である。ブルジョア社会学を回復させることは, この陰謀活動の一段階であり, 章羅聯盟が文教科学事業における党の指導権を奪い取ろうとする重要な活動の場である。この場で, 費孝通はまるで社会学界の「顔役」のような姿ででてきて, 終始党に不満をもつかれの「先生」であり追従者でもある潘光旦, 陳達, 呉文藻, 呉景超, 李景漢(かれらはすべて右派分子である)を引っ張り込んだ。互いに結託し, 互いに提灯をもち合い, 合法的組織を利用して非合法活動を行ない, 雰囲気をつくり, ブルジョア社会学の復活活動の陰謀を企んだ。この綱領があり, 計画をもち, 段階があり, 組織をもつ陰謀活動は, 今回の大規模な反右派闘争のなかで, 徹底的に暴きだされた。これはわれわれの政治戦線, 思想戦線で資本主義に打ち勝った巨大な勝利である。

われわれは中央民族学院が摘発した材料およびわれわれ自らの認識に基づいて, 三つの面から費孝通のブルジョア社会学は一体どのような代物であるかを述べる。

(一) 費孝通の「農村研究」にみるブルジョア社会学

ブルジョア社会学はマルクス主義の不倶戴天の敵である。それは種々さまざまな唯心主義理論を含んでおり、内容は反動的で墮落しており、その本質はブルジョアの利益を擁護し、マルクス=レーニン主義に反対し、プロレタリア革命に反対することである。

右派分子の費孝通、呉文藻が積極的に広める機能主義社会学は、帝国主義、植民地主義の「間接統治」の道具である。機能主義社会学は、帝国主義は植民地の立ち遅れた習俗制度を残し、一部の原住民の首長をとおして、植民地の人びとを統治すべきだと主張する。

費孝通は、かれの反動的な社会学でマルクス主義と敵対している。一方では封建地主階級の立場に立って、革命の前夜には、至るところで地主階級のために活路を探し求め、他方では買弁ブルジョアの立場に立って、帝国主義のボスに情報を提供した。

かれの農村「社会学」の著作のなかでは、真っ先に英文で『中国農民の生活』(副題『江村経済』、1939年)を著した。極度に反動的な機能主義学派の観点で、中国農村を立ち遅れて停滞した「士紳」(封建地主)の楽園として描写した。かれは事実を歪曲し、農民の革命闘争に反対し、地主階級の利益を擁護した。この本の巻頭には、かれの「先生」で、イギリス帝国主義・植民地主義に奉仕する機能主義社会学の先導者マリノフスキーが書いた序言があり、大々的にこの本を吹聴する。また、費孝通を「国家の偏見と民族の憎しみが少ない」中国の機能主義学派の青年「社会学者」と称賛した。これは、かれが「祖国や民族観念をもたない帝国主義の手先」であるといっているのである。

この反動的な「処女作」のほか、以後かれはまた次々と『禄村農田』、『郷土中国』、『郷土重建』、『中国士紳』(英文)などの反動的な著作を書いた。『郷土重建』(1948年)のなかで、かれは露骨に封建地主階級のために活路を求め、革命の嵐が必ず到来することを「予見」して、階級闘争に反対し、土地改革に反対した。それゆえ、かれは巧妙に「郷土工業」という活路を考えついた。つまり、封建地主階級が土地搾取を次第に「郷土工業」による資本搾取に転化させることである。この地主、ブルジョア階級の忠実な後継者はほんとうに「気を使うことが並大抵ではない」。『禄村農田』(1944年)のなかでは、さらに露骨にマルクス主義に反対する論点を提出したが、これは帝国主義をもっともすばらしいものとした。かれは社会発展の客観的法則を「鉄律」(不変的法則)と皮肉って、「25年代の社会史論戦はとても賑やかで大騒ぎになったが、不幸なことはかれら(著者林耀華注:マルクス主義者を指す)が尊ぶ「鉄律」は事実に基づく根拠のあるものではない。社会変遷は決してマルクス主義者が思うような簡単なものではない。マルクス自身でさえも自らが深く信ずる進化プロセスが東アジアに通用できるか否かについて、判断を保留して論じていない。いわんや公式の本領に精通したひとはまだおらず、自然と精彩に欠ける」(『禄村農田』、p.190)。ここでは、費孝通はマルクス主義者をきわめてあくどく中傷している。

『中国士紳』(China's Gentry)は費孝通が解放前に(1948年ごろ)発表した6編を寄せ集

めたものであり、かれのアメリカの「友人」の R. レッドフィールド(雷得斐爾德)の妻(Mrs. Redfield)によって英文に訳されて、1953年にアメリカで出版された。費孝通は自白のなかで、この本の出版は自分の同意をえたものでないというが、これは正直ではない。というのもアメリカのやり方によれば、本の出版は必ず著者本人あるいは代理人と契約を結んだ後に出版するので、費が知らなかったと言い逃れをするのは嘘である。この本はとくに農村と知識分子の二つのカギとなる問題を提出し、中国共産党と社会主義制度を誹謗しており、かれは完全に地主・名士の立場に立ち、三大敵<sup>(4)</sup>の中国統治を擁護し、解放戦争に反対し、革命を拒否している。これらの資料はすべて帝国主義集団にわれわれの人民民主政權を敵視する根拠として提供されており、同時に資本主義社会の一部のひとに新中国の様相について誤った理解を生みださせた。訳者は費の文章には、老子の「無為」と孔子の「中庸」の色合いが充満していると指摘して、中国の2000年余りの文化的伝統は同じ所の興亡の循環の変化だと歪曲していい、今日の中国は「衰退期」の時代であると中傷した。費孝通は農村で深く掘りさげた調査を行っていないが、一面的で歪曲した材料で、ひとに中国の伝統文化の勢力が依然として非常に大きいと誤解させることを意図している。したがって、訳者は深い敵意を抱いてわれわれの国家がいつかは突然暴発して、この国の独自の文化全体(過去の封建社会の文化、すなわち費孝通のいう「郷土文化」をさす)に戻ると呪った。以上のいくつかの点からみれば、われわれは費孝通の最近の「知識分子論」と解放直前の「中国士紳論」はもとのまま手付かずであり、同じ宗旨や気風を受け継いでいることがわかる。もちろん、かれの反動的な「社会学理論」について、今後さらに深く掘り下げて批判していかなければならない。

「学術」上、費孝通は頑なに反動的な封建地主階級と買弁ブルジョアの立場に立っており、反共、反人民、反社会主義の道を歩むことも必然的なことである。反動統治集団が極めて危機に瀕した時、かれの反動的な政治の立場はますますはっきりとした。解放直前、反動統治集団のために積極的に奔走した。かれは北京で反動的な刊行物『新路』のために文章を書き、中間路線を鼓吹した。そのうえ、衛立煌の招きにこたえて、右派分子の陳達らと東北に「特別講義」に行つて、国民党反動派のために人心をつなぎとめた。また、アメリカ帝国主義の代理人司徒雷登(John Leighton Stuart)、アメリカの文化スパイ費正清、北京のアメリカ領事館と頻りに往来した。この一連の活動はすべて当時の反動政權のための奉仕である。解放後、費孝通は思想改造を拒み、反動の立場を固執しており(たとえば、『重訪江村』およびそのほかの反動的な活動はすでにほかの同志によって暴かれて批判されているので、ここでは省略する)、したがってかれは反共、反人民、反社会主義の道にどんどん深く落ち込んだのは決して偶然のことではない。

## (二) 費孝通の「民族研究」にみるブルジョア社会学

費孝通の「社会学研究」の第2の面は、わが国の少数民族についての社会調査である。解放後、かれはかつて民族学の「専門家」として自分を過大評価した。かれは以前ひとに向かって、「農村調査を行なうことでは、われわれは共産党にかなわない。しかし、少数民族の研究は、党には過去に経験がないので、われわれはやはり大いにやりがいがある」と語った。かれは党の少数民族の仕事の輝かしい成果を故意に抹殺している。いま、この民族学の「専門家」が一体どのような「仕事」をしたかをみてみよう。

費孝通は少数民族地区でわずか数回の仕事に携わったにすぎない。

(1) 1935年、広西象県花藍瑶地区で1か月余りの「調査」に携わった。このいわゆる「調査」は李宗仁、黄旭初の資金援助を受け、かれらに資料を提供した。これらの資料は非合法政府の広西省反動派が後に瑶山の兄弟民族に向かって包圍討伐をするための情報として使われた。いまに至るもこの地のヤオ族の人びとは費孝通を心底憎んでいる。

(2) 解放後、2回少数民族訪問団の仕事に参加したことがあり、一方の領導の仕事を担当した。途中、中央「高官」の尊大ぶったそぶり、民族政策に違反する言論を発表した。たとえば、一度南寧交際処から外出して、費孝通は車のなかで一人の回族の幹部に、「回族の人たちはなぜ豚肉を食べないのか」と問いかけ、続いて「わたしは食べても問題がないと思う」といった。それからまた「必ずしも食べないことはないでしょう」といった。この訪問団の参加で、かれはさほど現地調査の仕事をしなかったし、まして研究という話にはならなかった。それにもかかわらず、費孝通は恥もなく自己PRし、僮族(壮族 *Zhuangzu* の古い書き方)を発見したといった。実際は、中央の指導同志や関係する同志が数知れないほど大小さまざまな会議を経て、厳粛で真剣な研究討論の後、やっと僮族の民族識別を確認したのである。

(3) 1955年、中央民族学院研究部が調査グループを組織し、貴州へ「穿青人」の民族識別について調査をした。費孝通自身はグループ長になったが、自分で決して農村に行つて現地調査をしないで、ただ町と農村の間で指揮連絡の仕事を行なっただけである。しかし、「穿青人」の民族識別の研究の仕事を総括した時、かれは調査研究にともに参加した数10人の同志の仕事の成果を抹殺し、研究報告にはただ費孝通一人の名前を書いた。これはかれの一貫したやり方であり、この点について以下に詳しく述べたい。

(4) 1956年、費孝通は民族委員会が指導する雲南省少数民族社会歴史調査研究組に参加した。かれは組長であり、グループに分かれて景頗族(チンポー族)の調査活動に参加した。しかし、実際には景頗族の調査は宋蜀華同志らが責任を受けもち、費孝通はただ車で山の麓に行き、山上の景頗族の集落をちょっと遠望しただけであり、調査を行なっていない。かれは時間の大部分をずっと昆明に滞在し、專家局副局長の名目で、党に不満をもつ多くのひとに一人一人連絡して、至るところで煽動し、まさに章羅聯盟のなかで「野戦指揮官」の重要

な責任を受けもった。

要するに、費孝通は少数民族についての研究は実際には話にならないほど乏しい。というのも、うえの何回かの民族調査を総計して、1935年に1か月余り現地「調査」活動を行なっただけであるし、またこの「調査」はどのような科学研究というほどでもなく、ただ反動派に少数民族を抑圧する情報を提供したにすぎないからである。

中央民族学院副院長、中国民族事務委員会副主任の資格であるのに、費孝通は故意に反動統治階級の民族政策と新中国の民族政策の間の区別をしなかった。国子監で挙行した民族出版社の創立記念会で、費孝通は講演した際に、国子監というところは従来、民族関係の仕事を行なうところだと公然と宣伝した。かれは国民党のモンゴル・チベット委員会がここで民族工作を行なってきたといった。また、かれは国際間の民族関係をそそのかし、かれが昨年雲南徳宏景頗地区に行った時、時まさに中国とビルマの両国の総理と大勢の人びとが国境で交歓していた。後に、かれはビルマの来賓に対して悪意のある中傷をして、中国とビルマの関係をそそのかした。われわれはこれがどんな意図をもつかを追求しなければならない。

これ以外に、われわれはまた費孝通の民族政策に対する歪曲の一例を説明することができる。1950年、かれが貴州で少数民族訪問団の仕事を主宰した時、かれは10数の民族名を一つのグループにまとめて「漢裔民族」(漢族の子孫が形成した民族という意味)と呼び、そしてこの「民族」の承認を吹聴する文章を書いた。民族問題に関するマルクス主義の理論によれば、民族は歴史上形成された人びとの共同体であり、人びとの意志によって変えることができない客観的に存在する共同体であることをわれわれは知っている。費孝通はこの道理を知らないわけではないが、意外にも奇想天外に主観的臆測で10数の異なった民族を合併させることを意図した。この「理論」は蒋介石の反動的「中華国族」の「理論」と、本質的に一体どのような違いがあるのか。

ブルジョア社会学の反動性はすでに費孝通をとおして、新中国の民族工作に少なくないダメージをもたらした。

### (三) 費孝通の「学問研究」の方法にみるブルジョア社会学

費孝通は地主の家庭の出身であり、長期にわたって英米のブルジョアの奴隷化教育を受けてきた。早くに、かれは人民を敵視する買弁、封建的な政治的立場を固めた。ブルジョア社会学の教育は、かれが個人の名誉と利益を追い求め、出世するために、これまで手段を選ばず、自分のためにすべてのひとを犠牲にした。政治資本を蓄積するために、かれが学問の手法をもちいたことは非常に卑劣なことである。かれは学問上、一貫して右派分子の手法をとって、わが国の農村生活の状態を大げさに歪曲して、英米帝国主義のあるじの要求に迎合した。かれの学問研究の態度は極めて不誠実である。たとえば、現地調査の価値を強調するふりをして、実際には生涯に行なった農村調査は5か月に満たず、被調査者は2,069人であ

る(呉江開弦弓村の1,458人, 1936年の3週間と1957年春の20日間。雲南祿村611人, 1938-1939年の前後して38日と2か月間)。かれは前後して『江村経済』と『祿村農田』の2冊を著して, 英訳後タイトルはそれぞれ *The Peasant Life in China* (中国農民的生活) と *Earthbound China* (被土地限制了的中国) とした。*Earthbound China* は『祿村農田』以外に, 張子毅が書いた「易村手工業」と「王村土地與商業」の2編の資料を付け足している)。なんと中国の5億の農民のすべての状態を代替させて, それによって中国すべての農民を侮蔑しており, 徹底したでたらめであり, 恥知らずの極みである。

費孝通は学問に時間や精力をそれほどかけていない, ふだん読書は少なく, たとえかれが吹聴する機能主義学派にも, かれはまじめに時間や精力を投入していない。ただいくつかの術語—たとえば機能, 制度, 差序格局<sup>⑤</sup>など—をひけらかすだけであり, 読者をごまかし欺く。かれの「学問研究」はいつも話しのつじつまが合わなく, とりとめなく話を流す。たとえば, 『郷土中国』のなかで, かれの娘の本籍の問題から話を起こして, なんと中国の解放前の血縁関係が支配的な地位を占める社会におよぶ。つまり, 氏族が要である立ち遅れた「郷土社会」であり, これをもって西洋の文明の「法治社会」と区別しようとした。このように20世紀の半封建・半植民地の中国社会をなんといきなり原始氏族社会の時代に戻して, 帝国主義が中国を侵略するための理論的根拠をつくりだした。

このほか, 費孝通は学生にもものを教えることに平素から責任を負わないし, 事前に講義の準備をしないで, 授業では立て板に水を流すように口からでまかせをいい, 一部の学問の名前, たとえば科学, 民族学, 「社会学」の定義でさえもはっきりしない。さらに劣悪なことは, 費孝通はいつも他人の研究成果を「剽窃して」自分のものとした。たとえば, かれは学生時代に, 二人の同級生と共訳したマリノフスキーの『文化論』は, 後に商務印書館から出版した時には, 訳者には費孝通一人の名前だけだった。また「卡瓦社会概況」は, もともと卡瓦(族)を研究する雲南のひとが費孝通の名を慕って, 自分の著作を費孝通に郵送し, 費の意見を請うたものだが, 費孝通の改訂・追補を経た後, 結局費自らの著作になった。また, 「現在の民族工作が民族学研究に提起する課題」という一文は, もともとわたし(林耀華……星挿入)が去年ソ連へ持参し, 全ソ連民族学討論会に参加し, 発表した論文であった。この文章を起草する時, わたしは陳永齡, 宋蜀華の二人の同志に協力を願って作成したが, 後に, 中央民族学院研究部の関係する同志の討論, 整理を経たもので, 同志たちの集団研究の成果であるべきだが, 費孝通は改訂の名目を口実にして, 公開發表の時にはかれの著作に変わった。費孝通のこのような卑劣な手法については, すでに中央民族学院の同志から非常に多く暴露されているので, ここでは省略する。

過去, 「社会学」の害毒を受けた一部のひとは, 絶え間ない改造を経て, まさに各自の職場で社会主義建設の偉大な目標のために, 心地よく仕事をしている。右派分子の費孝通らは仮面をかぶり, 「社会学者」のために活路を探すように偽装して, 政治的陰謀を進めている

のは、完全にペテンである。右派分子が学術の表看板を掲げて行なう政治的陰謀は必ず徹底的に暴きだし、批判しなければならない。われわれは費孝通がブルジョア社会学の復活を企むことに断固として反対する。いうまでもなく、われわれは自から今後必ずマルクス=レーニン主義の学習を強化し、徹底的に思想改造を行ない、社会主義事業のために誠心誠意最後まで奮闘しなければならない。

出典：林耀華，1958，「費孝通のブルジョア社会学はどのような代物か」，上掲，pp.523-530。

うえて林耀華は社会学者、人類学者、民族学者、共産党員の立場から、費孝通をはじめ潘光旦、陳達、呉文藻、呉景超、李景漢も批判している。費孝通については農村研究、民族調査、学問に対する姿勢の三つの面からそれぞれ批判している。すなわち、費は農村研究では封建地主階級の立場から農民の革命闘争に反対し、土地改革に反対し、地主階級の利益を守り、活路を開くために郷土工業を考えつくが、これは土地搾取を資本搾取へ換えるものだと批判する。次に民族調査では費の調査時の被調査者および共同調査者への敬意の欠如、調査への主体的関与・コミットメントの欠如、調査成果の独占や独占的解釈などが批判されている。最後に、学問に対する姿勢では費が学問外的な私的な関心を満たしたこと、調査研究の少なさ、共同調査研究者の成果の剽窃やネグレクト、研究成果の米英への情報提供などを批判している。社会学者林耀華が社会学者費孝通を批判している一例である（前号 74 号の拙稿では、社会学者孫本文<sup>(6)</sup>が文中で費孝通を批判している）。

林耀華（1910-2000）は 1928 年から 1935 年まで北京の燕京大学社会学部で学び、1932 年に学士学位、1935 年に修士学位をえた後、1937 年にアメリカのハーヴァード大学で人類学を専攻し、哲学博士を獲得した。1941 年に帰国後、雲南大学、燕京大学、北京大学および中央民族学院で原始社会史、民族学の教育と研究に従事した<sup>(7)</sup>。

その主要な著書には *The Golden Wing: A Sociological Study of Chinese Family*, 1944。中国語版、『凉山彝家』（1947）、『従猿到人的研究』（1951）、『原始社会史』（主編、1984）、『民族学研究』（論文集、1985）、『金翼－中国家族制度的社会学研究』（庄孔韶、林宗成訳、1989）、『従書齋到田野』（2000）などがある。

## 7. 周叔蓮「費孝通は開弦弓村をどのように調査したか」

わたしは費孝通と一緒に開弦弓で農村調査を行なった、当初わたしはかれを学者と考えていたし、農村調査は学術活動だと考えていた。このたびの反右派運動がわたしの認識を高めてくれ、わたしは費孝通が学術活動の表看板を掲げて、反共・反社会主義の政治的陰謀活動を行なっていることに気づいた。

費孝通がこのたび江村を再訪する目的をまとめると、新中国の農村を汚し、合作化運動を

壊し、農民の団結を壊し、食糧の国家による統一買付と統一販売の政策を壊し、農民と国家の関係および農民と党の関係を裂いて、ブルジョア社会学の回復のための基礎を築き、帝国主義に情報を提供することになる。

このようなほかのひとにいけない目的を達成するために、かれは種々さまざまな手法を使った。かれは当初、われわれにこの調査の目的は国外に新中国の農村の状況を紹介することであると告げた。しかしまさにわれわれがこの目的に基づいて、この村の解放後の土地改良、合作化、生産力の発展、農民の収入の増加などの状況の調査に着手した時、かれは逆にわれわれのこのようなやり方に反対し、われわれにまず1936年と1956年のこの村の農民の平均収入を計算することを要求した。かれがわれわれにこのような計算をさせた意図は非常に悪辣だった。一面では、これではわれわれが解放後の生産関係の変革と生産力の発展を調べる時間的余裕がなくなる。というのも調査時に、1936年の状況を改めて調べなければならぬので、計算の仕事は非常に煩雑で重大となり、この以外に時間的余裕はなかったからである。別の面では、この計算はかれに新中国の農村を汚す数字の「根拠」を提供するものであるからである。

開弦弓村はとりわけ有利な自然経済条件によって、抗日戦争前の収入が一般の農村に比べてずっと高かったし、また1936年の収入もこの村の解放前の最高の収入水準であった。費孝通はこの村の1936年と1956年の収入を選んで比較したが、その目的は1956年のこの村の合作化後の農民収入がまだ解放以前に及ばないという結論をえたいためである。かれは、われわれの計算結果をかれの主観的な願望と一致させるために、絶えずわれわれにこの村の過去の収入がどんなに多かったか、農民がどんなに豊かであったか、現在の副業生産がどんなに振るわなくなったかなどを宣伝し、同時にまた農民の発展途中での障害をみつけるのを助けて、合作化のよい面ばかりをいうことをしてはいけないなどの表看板でわれわれを惑わせた。かれは当初、1956年の収入が1936年よりさらに少ないことを証明するために、われわれの計算結果を望んでいたが、しかしこの村の1956年の収入は1936年よりはるかに増加した。たとえわれわれはかれの「現在の収入は過去には及ばない」という宣伝の影響を受けたとしても、計算された数字はやはり1956年の一人当たりの平均収入は1936年より5%増えていた。この数字こそ、後に費孝通が『新観察』に公に発表した数字である。

費孝通がこの数字を発表した時、調査活動はまだ終わっておらず、計算の経過と結果はまだチェックをしているところであり、われわれもかつてかれにこの数字はまだ不正確であり、すぐに発表するのはよくないといったことがある。しかし、かれは却ってこれを顧みることなく、軽率に公に発表した。かれは蘇州を經由した時、これらの数字を利用し今日の農村の状況は抗戦前に及ばないと盛んに宣伝し、『新観察』上ではさらに系統的にこれらの一連の謬論を詳述した。われわれが後に照合した結果によれば、費孝通が発表した数字には重大な誤りがあることがわかった。開弦弓村の1956年の一人当たりの平均収入は1936年と

比べて5%の増加ではない。この村は1956年に近隣の二つの村と合併し、一つの高級社になった。たとえば1956年は高級社単位の計算によれば、一人当たりの平均収入は1936年より20%以上増加したし、この村の単独計算では増加はさらに多い。ここで費孝通がなぜこの間違っただけの数字を慌てて発表したかがわかる。

実際には、かれは決して先に数字があったうえでの結論ではなく、先に結論があり、それからかれの政治的陰謀に符合する数字を探したのである。かれはこの数字をわざと利用して、悪辣な宣伝を行なった。まさに、この数字を利用してかれは新中国の農村を汚し、そして党と農民の関係を裂くといった多くの文章を書いた。

費孝通はわれわれが計算した全村一人当たり(各階級を含む)の平均収入を必要としただけであり、われわれが計算した各階級の一人当たりの平均収入は必要としなかった。というのも、かれは各階級の収入を計算して、大多数の労働農民の合作化後の収入が解放前の最高収入と比べて大きく増加することが裏付けられることを知っていたからである。しかし、憎らしいことにはかれは『重訪江村』のなかで結局なんの根拠もなく、「中農の収入の大部分には大きな上昇はない」、「昔ほど暮らし向きがよくないと感じている戸数は少なくない」といっている。ここで、かれは党と農民の関係を悪辣に裂いている。幸いなことに、かれが離れた後、われわれはこの村のいくつかの典型的な農家の20年来の収入の変化の状況を理解した。われわれの理解によれば、1956年は1936年の一人当たりの平均収入と比べて、一般的な中農は約40%前後増加し、貧農・雇農は約50%前後増加したのみならず、ある一部の貧農・雇農は2,3倍も増加した。上農・中農は過去に搾取階級あるいは現在労働力が減少した農家を除くと、一般的に収入が増加できた。この村では土地改良の時、貧農・雇農は全村の農家の54%、中農は40%を占めており、これらの農家の大多数の合作後の収入は戦前の最高収入の水準と比べて大きく増加したが、費孝通は結局、中農の収入はほとんど増加せず、収入が減少した農家は少数ではないと中傷したが、その魂胆がいかに陰険であるかがわかる。

費孝通は農民収入が減少したことを悪意で宣伝すると同時に、また解放後の農村の副業生産状況について平然と歪曲し、汚した。かれは解放後の開弦弓村の農業生産が極めて大きく増長したことは否認のしようがなかったが、しかし主に、解放後7年で上昇した生産量を解放前後20年で上昇した生産量といいくめた。この村の1936年の一畝当たりの収穫量は約350斤、1948年は解放前の最高の収穫量で、一畝当たり380斤である。解放後は迅速に増加し1956年には559斤に達した。解放前13年は8.5%増加し、解放後7年は47%増加したが、しかし、費孝通は20年の平均増加は6%だったと書き換えた。

費孝通はとくに副業生産について共産党の方策を大げさに攻撃した。この村の養蚕業は抗戦中に衰退したが、しかしかれは逆に解放後に衰退したといった。この村の製糸工場は抗戦中に日本の侵略者や売国奴によって取り壊されたが、かれはそれを解放後の所業に取り入れ

た。かれは抗戦前の販運収入(品物を仕入れてよそへ運んで売った収入)を誇張したが、実際は解放後によくやく販運収入は迅速に発展した。しかし、それは商業的な性質をもつことによって、かつて農業生産と合作化運動を著しく妨げたことがあり、政府が説得教育とそのほかの経済的な措置をとおしてよくやく販運業務は次第に廃止されたが、運輸業はそのままにされた。かれは養蚕、製糸、販運などの副業の衰退をわざと大げさにいったが、しかし解放後、とくに合作化後に発展してきた副業については却って言及しないし、論及さえしない。合作化後、この村は専業の漁業、エビ業の組織をつくり、エビの捕獲の規模は戦前と比べて倍増し、ヒシの種子、養魚、初摺り、脱穀、養豚などの副業を新たに経営した。費孝通は解放後の副業生産の発展を無視し、今後発展する副業生産のために合作化が有利な条件を提供することを無視し、まったく根拠なく解放後に副業生産が衰退したと言明して、人民政府が副業生産をないがしろにしたとあくどく非難した。

実際は、費孝通はまったく開弦弓村の20年来の農村の副業生産の変化過程を調査しないで、もっぱら苦心惨憺して共産党に反対する文章を書いているだけである。かれはわれわれが農業合作化運動を調査することに反対し、逆にわれわれに「郷土工業」の問題を調査研究させた。かれは中国の農村は人口が多くて土地は狭く、農業増産の潜在力は一定の限度があるので、収入を増やすのは主として副業しだいであるといった。同時に、かれは社会主義工業化に反対することを目的とするすでに悪評高いいわゆる「郷土工業」の理論を絶えず広めた。かれはあくどい意図を抱いて農村に存在する矛盾を極力探したり、つくりだそうとした。これらの矛盾を農民の団結および党と農民の関係を壊すという目的を達成するまで、苦心して極力広げようとした。かれはまたわれわれに二つのテーマを出して、われわれにこれらのテーマをめぐる論文を書くように要求した。一つは農村副業地区の分業問題である。開弦弓村は解放前主に浙江山区から輸入する桑の葉によって養蚕したが、解放後これらの山区の農民は集団として組織されて、養蚕の条件も整えたので、桑の葉の輸入は減少した。費孝通は異なる地区の農民の間のこの矛盾をみて、地区の分業の原則が破壊されていることを口実にし、過去の私有制時代の地区の分業を回復させることを主張した。つまり、桑の木を栽培する地区に解放後すでに発展してきた養蚕事業を放棄することを要求した。名目上は開弦弓村の農民のための収入の増加を構想しながら、実際には農民間の関係を裂いて、農民の団結を壊した。費孝通は桑の葉の遠距離運輸を明らかに知っており、桑の葉は避けることできないかなりの損失欠損を受けるだけではなく、そのうえ多大な輸送費用をかけなければならず、繭、生糸の原価が増加することも明らかに知っている。かれは人民政府が提出した現地で桑を植え、現地で養蚕することは、養蚕事業をより計画的に迅速に発展させる正しい主張も知っている。しかし、却ってかれは悪辣な下心を抱き、地区分業を回復させるという名目で、以前は桑の葉を輸入した地区の農民が政府の政策に反対することをそそのかした。かれはわれわれが行なったこのテーマはかれの政治的陰謀ための論拠を探すためであった。かれ

は『重訪江村』のなかで、この農民間の関係を裂く主張を公に吐露した。

かれがだした別の一つのテーマは、加工業における国家と農業社の分業問題である。かれは、現在国家経営の製糸工場はこの村の農民の加工業収入を奪っているといい、農民が製糸工場を経営することによって、この収入を取り戻すことを主張している。この主張はかつて『重訪江村』のなかでも公に語られており、かれが製糸工場を再建する主張を提出した明らかな意図は、農民に国家が計画的に、比例に準じて生糸産業を発展させる方針に反対させることであり、農民が繭を国家に売りたくないようさせると同時に、農業社を駆り立てて、農業社の経営力のない加工業を推進させることである。費孝通は国家が計画的に工業を発展させる方針を変えることで、開弦弓村の一部地区の目の利益を満たすことができないことを明らかに知っており、かれがこの建議を提出したのは、ただ農業社と農民を国家と対立する境地に引き入れようとするだけのことだとしかいいえない。

費孝通は調査のなかで、新しく進歩したあらゆるものに対して少しも関心をもたないのに、却って旧時代が残して遅れているあらゆるものについては興味深げに話した。かれはわれわれが農業合作化運動の歴史を調査することに再三反対したので、かれが開弦弓村を離れた後に、ようやくまたこの村の合作化の過程を自発的に調査した。しかし、費孝通は結局再三この村の過去の絹織工場を称賛し、それは合作の性質であり、農民に多くの利点をもたらしたという。実際には、これは地主資本家の手中で封建的、資本主義的な方法で農民を苛酷に剥奪するコントロールの道具であり、農民革命の意志を麻痺させる手段である。この工場の出資金の一部分は農民がだしたものであるけれども、しかし実質はむしろ地主資本家が独占しており、農民が繭を絹織工場に売る価格と市価は完全に同じであり、絹織工場が操業をはじめて10年間で最初の1年に農民に1度微々たる配当金を分配しただけであり、以後出資金も取り戻していない。絹織工場のすべての経営管理権は地主資本家に握られている。費孝通はこのことを知らないことはないのに、却って避けて話さない。かれがこの絹織工場を称賛する目的は農民と国家の矛盾をつくりだし、資本主義制度を吹聴し、農民を社会主義の道路から離して、再び地主資本家の搾取圧迫に引き寄せることにある。費孝通はまた商業販運を回復させることを主張したが、これも別に下心があった。この販運は解放後に以前の農民の資本主義が自然発生的な趨勢の集結したあらわれであり、一部の富裕な農民は合作社に加入した後にまたこの種の商業経営にあこがれた。費孝通は商業販運を回復させることをとおして、資本主義を回復させようとした。

費孝通は農村での主要な時間を人口、婚姻、教育面の調査に費やした。かれが人口を調査するのはマルサスの人口論のために証明する材料を探し、再びかれの「中国の農村問題は土地が狭く、人口が多い」という代物を売り込み、同時に新中国でも人口過剰の問題を解決する方法がないことを証明するためである。かれが著した江村経済にこの村の1935年の性別・年齢別の人口統計表があるが、かれはこの表は中国でまたとない、非常に貴重なものと

認め、さっそく自ら1956年の同様の統計表の作成に着手した。はからずもかれ自らが計算した統計表のなかに、1935年と1956年を比べると人口には増加がなかった。というのは、その1935年の統計数字には誤りがあったからである。ところがかれはこの非常に貴重な統計表を否定したがる。このように大胆に仮設して、慎重に証拠を探す多くの仕事をはじめた。かれはまず抗戦中は人口の死亡率が高く、出生率は低いと仮定し、後にまた人口に移動があると仮定したが、これらはすべて自分の説のつじつまを合わせることができず、最後にかれは間引きをみつけたし、この遅れた現象を用いて一挙両得を意図した。すなわち一方で新中国の農村の様相を醜く描き、もう一方でマルサスの人口論の正しさを証明しようとした。かれはマルサスの人口論を批判する学者に対して極度に憎み嫌う批判をし、マルサスの人口論を売り込む者を批判した王亜南は教条主義者だとなんどもわれわれの面前で罵った。かれは多くの時間を費やして、残存する間引き現象および残存する封建的な婚姻関係を収集し、これらの紹介をとおして新中国の農村の恥をさらそうとした。かれはまた童養媳制度<sup>8)</sup>は男女の配偶者問題の解決に有利であるといった。かれは当初は教育問題を調査する積りはなかったが、後に教育活動のなかに欠点があることを耳にしてから、すぐにこれらの欠点を収集することを突然決定し、新農村を汚す資料を増やそうと考えた。かれは第3編の『重訪江村』で、家族、婚姻、文化、教育などの遅れた現象を紹介しようとするに決めていたが、かれの右派分子の面貌が明るみにだされたために、願いどおりにならなかった。かれはこのようにあらゆる機会に乗じて資料を収集し、新中国の農村を攻撃した。

費孝通は『重訪江村』のなかで、ほかに合作化後に船舶利用率が下がったこと、資金蓄積が減少したことを汚したが、かれはまったくこの方面の調査をしていない。事実上、開弦弓村は合作化以後、船舶利用はより合理化されて、利用率も高まった。開弦弓農業社はすでに一定の共同の蓄積があり、社員個人が蓄積したのも非常に多かった。しかし費孝通にとって重要なことは共産党と社会主義制度を攻撃することであり、調査を経ているかどうか、資料が正確であるかどうかはいつでもよいのである。

費孝通は『重訪江村』のなかでも全力を傾注して国家の食料の統一買付・統一販売を攻撃したし、かれは第1編の『重訪江村』の冒頭で農村の食糧のひっ迫をほのめかしたと思うと、すぐに第2編の記述でこのひっ迫状況をとくに誇張した。かれは1人が1年に380斤の食糧でも、760斤でも食べ切るとさえいうが、これは農民が十分に食べられない半ば飢えの生活をしていると中傷したものである。かれは『内地農村』のなかで1人当たり1年に米350斤が必要といったが、現在開弦弓村ではすでに380斤に達している。それなのにかれは却ってまた760斤でも食べ切るといった、かれは農民が統一買付・統一販売政策に反対することを悪辣にそそのかした。実際には、かれははじめから農民の食糧分配の消費状況を1戸たりとも調査しておらず、ただ故意に状況を捏造し、統一買付・統一販売政策を攻撃しただけである。事実上、開弦弓村の大部分の農民の食糧消費量は過去と比べて上昇した

し、全村の農民1人が必要とする食糧は十分足りていた。

総括していえば、費孝通は調査のなかでこのように成果を抹消し、欠点を拡大し、立ち遅れた現象を収集し、状況を捏造し、数字を偽造し、矛盾をでっち上げ、矛盾を拡大するなどの手管を利用して、新中国の農村を汚し、党と農民の関係を裂き、共産党を攻撃し、社会主義制度を攻撃した。同時に、資本主義制度の優越をはばかりなく誇張し、農村で資本主義を回復する道を探し、すでに農村で資本主義を復活する罪ふかい方案さえ立案して、資本主義を新中国の農村で復活させる陰謀さえしている。

費孝通はかつてわれわれに開弦弓村の状況を世界の先進レベルの報告と論文にまとめる積りだと吹聴し、それを国外にもって行き、かれの兄弟弟子(反動的機能主義の代表者マリノフスキーのそのほかの弟子)と首位を争ったが、もちろんこれはだれがより有効に帝国主義に奉仕できるかという争いである。われわれはかつて開弦弓村の20年来の各歴史時期の主要な矛盾に基づいて材料を整理すると提起したけれども、かれはまたわれわれに「重訪江村」の体系論点に基づいて詳細な調査報告を整理すべきと「指示」した。これは怪しむに足らぬことである。というのも、かれの体系の論点に基づいて報告を書きあげてこそやっとかれの目的に到達できるからである。われわれもかれがこのたびの調査を利用し、帝国主義に情報を提供する陰謀を軽視すべきでない。かれは調査前後にブルジョア社会学を回復させることを公に提出したし、またかれはこのたびの調査を使って、この回復工作のための基礎を固めようとした。かれのこのたびの調査の状況と結果から、人びとは現在ブルジョア社会学を回復させる意味がなにかを知ることができる。社会主義の利益のために、われわれは費孝通が新中国の農村を汚し、党と農民の関係を裂くことを許すことができないし、またブルジョア社会学の復活を許すことができない。

付け加えて二つの状況を話したい。第一に、かれはかつてわれわれにかれが今後書く文章を集める積りといった。われわれはかれに過去のものを収集していないことはあるまいと尋ねたが、かれは解放前のものを収集したが、解放以後に書いた大部分はその場に適応した文章であり、価値がないので、「早春天気」<sup>⑨</sup>のような類の文章だけが価値があり、以後このような価値がある文章を書きたいといった。ここからも費孝通の本分をみることができる。かれは解放後ずっと進歩を装い、党と人民を欺いたことを証明している。しかし常に時機をまち、風向きをうかがって、かれが有利と認める「天気」になれば、すぐに党と社会主義に向かって中傷を放つのである。

第二に、費孝通は常にブルジョアの個人主義の思想で青年に害毒を与えたことを忘れてはならない、かれはかつてわたしと一緒に行った一人の青年にこの村の農具を写真に撮らせて、また写真に少し説明を加えれば、かれの審査用の博士論文になるといった。これもまさにブルジョア右派が常に使用する青年に迎合して、そして青年を捕虜にして、かれの反共、反人民のための道具として利用する手法である。

偉大な反右派闘争を経て、われわれは費孝通がいわゆる「学者」の偽装をまとい、煽動し、矛盾をでっち上げ、群衆に党と国家に反対することを挑発する政治的陰謀家であることをはっきり見極め、はっきり認識した。費孝通は偽装を徹底的に剥ぎ、人民に武装を解除して投降してこそ、はじめて人民の寛大な許しをえることができる。

出典：周叔蓮「費孝通は開弦弓村をどのように調査したか」、1958、上掲、pp.557-563。

周叔蓮は1956年に費孝通と一緒に開弦弓村を調査している。周は経済学者として、そして共産党員として費の統計の取り方、数字の誤り、調査の方法について具体的な事例をあげて批判しているとともに、解放後の農民収入は解放前のそれより減少したと間違えて発表したこと、副業生産（漁業、エビ業、養魚、養豚など）が解放後に衰退したと言明したこと、社会主義工業化の反対し、郷土工業の理論を広めたこと、国家経営の製糸工場に反対し、農民による加工工場経営を主張したこと、解放後の絹織工業や商業販運の回復をとおして資本主義の回復を企てたことなどを批判している。

周叔蓮（1929-2018）は1953年に復旦大学経済学部を卒業後、中国科学院経済研究所（現在の中国社会科学院経済研究所の前身）に分配され、中国近代経済史、牧畜業・手工業・水土保存などの調査、農業経済問題などを研究してきた<sup>(10)</sup>。

主要著作には『経済結構と経済効果』（1983）、『中国工業発展戦略問題研究』（主編、1985）、『中国式社会主義経済探索』（1985）、『中国的経済改革と企業改革』（1989）、『中国産業政策研究』（主編、1990）、『中国的現代化と経済改革』（英文版主編、スウェーデンのストックホルム大学、1992）などがある<sup>(11)</sup>。

#### 8. 許征帆「呉景超が社会学をやる目的は反動勢力のために尽力することである」

右派の総大将呉景超は、ブルジョア社会学の博士である。現在に至るまで、この「学者」の全経歴の特徴は社会学を運用して元手とし、反動派のために奉仕し、反ソ連、反共、反人民を堅持したことである。数十年来、かれは自らのいわゆる「学術活動」を反動的な政治活動と緊密に結びつけた。かれは学生に教え、雑誌を発行し、学会を創立し、論文を書いたが、つまるところすべて革命の力を攻撃し、自らの反動の政治的影響を拡大し、それをもって反動派に気に入られ、「学問がよくできれば官途に就く」という目的を達成するためである。しかも、かれは官職に就いた後も、自らの「学術」活動と「学者」の肩書を簡単に捨てなかった。これらの活動と肩書は、かれに一般の官僚、政客よりさらに大きな欺瞞性をもたせ、かれの地位をより強固なものとした。呉景超の反動的な経歴のすべてがわれわれに教えていることは、かれは一般の社会学者ではなく、反動的な学者と反動的な政客が入り交じっており、両者が結合した典型的な人物だということである。しかし、昨日のかれのいわゆる「検討」

(自己批判)のなかでは、過去の醜悪な経歴にも触れなければ、現在章羅聯盟のなかで行なっている反動活動にも言及しておらず、まるで自分の誤りはただ不幸にも1,2回学術的な会議に参加したことだけだという。そうである以上、呉景超が自らの反共、反社会主義の犯罪行為の自白を拒否するならば、それなら、われわれは解放前と解放後をみて、この社会学者が一体どんなことを行なったのかを事実から証明する。かれは反動的政客と反動的学者の合体であり、決して罪をなすりつけられたものでなく、根拠があることは事実が証明している。

### 呉景超の社会学の顧客はだれか

ブルジョア右派分子の呉景超は、1928年にアメリカのシカゴ大学社会学部で博士の学位を獲得した。この年、帰国し南京の金陵大学で教職に就き、中国社会学<sup>(12)</sup>(ママ)の組織を発起した。その時、かれはかつてなんにんかの気心の知れた友人に、自分は北京に行きたくなく、清華大学に戻りたくない理由は、南京に留まり蒋介石の反動政府に接近するのが便利であるからだと説明したことがある。ただ単にこのことだけでも、呉景超が早くもすではっきりと、蔣反動一味が呉景超の社会学のもっとも理想とする顧客であり、自らの身を売る対象であることがわかる。

反動の鼻持ちならぬ「名声」はまだ大きくなかったので、当時の呉景超はすぐに蒋介石に才能を買われていなかった。かれは、さらに反動政治の資本を蓄積する必要があることを経験から学んだ。そこで1931年に、北京の清華大学の教授に転じ、この大学の学報『社会科学』の編集の責任を負った。また、胡適、翁文灝が発起して組織された「独立評論社」に加入した。骨身を惜しまず論文を書き、社会問題を研究する表看板で、社会学の道具を利用して反動政権のために陰謀を画策して、革命を攻撃した。

社会学部の廃止に反対し、思想改造に抵抗し、資本主義思想の拠点を保つことを企てた新たなボスに出会った後、反動政治の基盤のうえで大いに腕前を発揮するために、おごり高ぶり社会学という古い手練手管を再びひけらかすことができると思った。かれにとっては思いもよらず運が悪く、人民政府は社会主義文化の利益を拡大させるために、各高等教育機関で大学と学部・学科の調整を行ない、社会学部を廃止することを決定した。この決定に対して呉景超は至極当然に非常に敵視して、妻の龔葉雅に「社会学部の廃止には、私は死に切れない」といった。これだけでなく、そのうえ、かれは張東蓀が大学と学部・学科の調整に反対するために組織した罪深い活動に参加した。

螻蛄の斧を振るうようなもので動きを止められず、社会学はついに廃止された。この後、呉景超は無理やり求めてはだめであり、必ずいっそう弾力的なやり方、方法を用いて別の形で社会学の種を保存しなければならないと感じた。新たな組織の形式で、もっとも重要なこ

とはいわゆる「自我批判互助小組」(自己批判互助グループ)を設立することであり、費孝通、潘光旦、呉景超はこの組織をつくっただけでなく、拡張しようと努めた。このグループの任務は「自己批判」の表看板のもとで、旧社会学の学者を組織し、一緒に行動して、新たな局面に対処することである。

新たな活動の方法のなかで、もっとも重要なことは知識分子の思想改造に反対することである。呉景超はかつて「社会学をやるひとは自分の頭で考えることができるので、新たなものに対してはすべて引き受けることができる」というようにいいふらした。言外の意味は、かれらの仲間のひとは改造は必要ないということである。そのうえ、かれは華北大学へ学習に行くことを拒絶し、自分を教える資格のあるひとはいないといった。その時、かれと費孝通は一緒に思想改造運動および運動をしている積極分子を罵倒した。偽りの自己批判で、ごまかして、思想改造運動を通り抜けようと考えた。さらに指摘しなければならないのは、最近呉景超は極力旧知識界のなかの落後者や反動者を粉飾した。かれらを完全で非の打ちどころがないと形容し、この仲間のひとはに対して思想改造はもうまったく無駄だと示唆した。例をあげると、かれは右派分子の陳達、李景漢らをまるで神様のように祭りあげて、かつ民盟の中国人民大学支部の活動のなかで、また一貫して盟員の思想改造工作を無視した。かれは盟員に対して、1年に少なくとも必ず2編の学術論文を完成させなければならないが、そのほか(政治学習、思想改造を指す)はすべて余計な話であるといった。呉景超とそのほかの右派分子が思想改造工作を敵視したのは、多くの知識分子が思想改造の過程で社会主義の自覚を高めて、章羅聯盟の屋台骨をぐらつかせ、かれらの反社会主義の政治大軍の設立が妨げられることを怯えたからにはほかならない。

#### 社会学を回復し、資本主義の復活のための思想条件を準備する

中国共産党が「長期共存、互相監督」、「百家争鳴、百花齐放」の方針を提出してから、章伯鈞、羅隆基は「大いに力を発揮する」時機がすでにやってきたと思った。この指示を根拠にして、呉景超はあらゆる機会をつかんで、「監督」と「争鳴」の表看板のもとで、社会主義の事業を攻撃し、かつまた社会学の回復に着手し、思想上から資本主義の復活のための道をつけた。

民盟全国工作会議の準備委員会のグループ会議で、呉景超は「過去、改造にとくに力を入れ、みなさんはすべて進歩があった。今日団体の知恵を述べ、方針と政策、国家の大事に対して提言しなければならない……」、「新たな情勢のもとで、民盟は政策委員会(知識分子問題小組、外交小組、経済小組など、あるいは各種の問題の委員会を単独で成立させている)を組織し、国家の大計、方針や政策に対して常に調査研究を行ない、分析し、まとめなければならない」と盛んにいいふらした。会議後、かれはまたじかに章、羅に、全国人民代表大会、全国人民政治協商会議のほかに、各種の専門家(すなわち、右派知識分子)によって構

成される政策委員会を設立しなければならないと提案した。この一連の提案は自らのボスに喜んで受け入れられ、悪評の高い「政治設計院」<sup>(13)</sup>、「平反委員会」<sup>(14)</sup>という代物に発展した。……星注：中略……

今年3月12日、『争鳴』雑誌が開催した座談会で、呉景超は「百家争鳴はできるだけ相互監督の任務と結びつけよう」と提議した。ここに、かれの学術上の争鳴に政治闘争の内容を与える意図がはっきりした。「百家争鳴」は、かれからみれば、マルクス=レーニン主義の指導のもとで社会主義文化を発展させる方針ではなく、ブルジョア右派がさまざまな見解を密輸するのに便利であり、政治地盤と思想陣地を占領する表看板である。ここで、かれがマルクス=レーニン主義に反対し、ブルジョア社会学を復活させる陰謀を企てていることを取りあげ、証拠とする。

学者の仮面をかぶった呉景超は今年の1月に、「学術討論」の体裁で、「新中国で社会学の地位はまだあるのか」<sup>(15)</sup>という短文を発表し、マルクス=レーニン主義に対して探りを入れる攻撃を行なった。かれはこの攻撃が自分のボスの称賛を受けたことを見届けた(章羅聯盟は民盟の「科学計画」の名義で提出した「わが国の科学体制問題に関する若干の意見について」のなかで、かれの「意見」を受け入れて、「ブルジョア社会科学に対する態度を変えなければならない」と声をあげたと同時に、早々に歴史のごみ箱に捨てられたこの「科学」の「回復」を主張した)。また、社会ではすべての旧社会学者の喝采を受けた(10数名の旧社会学者-そのなかには労働改造分子を含む-が呉景超に敬意を表する手紙を送り、「あなたの大作はわが国の社会学会のために地位の蘇生を勝ちとって、われわれ旧社会学部の学生のために進軍の道を切り開いたことを感謝する」などといった)。これらの称賛と支持は呉景超を有頂天にさせ、ついに探りを入れる攻撃をさらに公然とした攻撃へと転じさせた。6月9日、費孝通、陳達、李景漢ら右派分子が出席するいわゆる「社会学工作準備委員会第1回会議」<sup>(16)</sup>で、呉景超はついに社会学部を開設して、もって旧社会学の後継者を養成し、かつブルジョア思想の影響を拡大することを提起した。まず北京、上海、広州、成都の4大都市の条件が整った(旧社会学者が比較的多いところを指す)大学に学部を設置するという具体的な方案を提出した。また北京市の中国人民大学社会調査研究室、中央民族学院、北京大学を社会学の復活拠点とすべきことを規定した。さらに公然なことは、かれらはなんと北京市の最初の社会学部ができさえすれば、呉文藻を学部主任に任命して、呉景超に社会学の基礎課程を担当させることを内定していた。この陰謀の会議で、また「中国社会学会」を設立する準備にかかり、本部は北京に設置し、そのほかの各地に支部を置き、過去に社会学を教えていたひとと社会学部の卒業生と連絡して、かれらのなかの国内にいてまだ職のない一部のひと(その大多数は醜い歴史問題をもつひと)のために活路を切り開き、またかれらのなかの海外に逃亡したひと(たとえば、呉景超が中国人民大学で教えることを切に望む劉大中ら)の帰国のために道をつけた。要するに一言でいえば、「学会」の任務はひとを集めて

勢力を張ることであり、章羅聯盟のために犠牲となるひとを広く集めることである。

ブルジョア社会学の復活を実現しようとするれば、必然的にわが国の指導思想であるマルクス=レーニン主義に反対することは必然であった。呉景超はマルクス=レーニン主義を教条主義だとして中傷し、「それはすでに多くのひとの世界観に影響を及ぼしている」と罵倒する。かれは挑発的な口調でマルクス=レーニン主義者がマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンを「盲信」し、かれらの著作を「批判」する勇気も、これらの「偶像」を玉座から引き降ろす勇気もないので、したがって教条主義者になると責めている。

出典：許征帆「呉景超が社会学をやる目的は反動勢力のために尽力することである」、1958、上掲、pp.568-584。

うえて許征帆は、呉景超は一般の社会学者ではなく、反動的学者と反動的政客が入り交じって両者が結合した典型的な人物であること、社会学研究を利用して反動的政権に接近して奉仕したこと、党の方針の百家争鳴と相互監督とを結びつけて社会主義の活動を攻撃したことならびに百家争鳴を社会学の復活のために利用したこと、知識分子の思想改造を不必要だとして否定したこと、マルクス=レーニン主義者はマルクスらを盲信し、批判する勇気も、偶像から引き降ろす勇気もない教条主義者だといっていることなどを批判している。

許は、呉景超はブルジョア社会学の博士であるとか、学問がよくできれば官途に就くという目的をもっているとか、アメリカのシカゴ大学社会学部で博士の学位を獲得したとかなどの記述から、反右派闘争の知識人批判、延いては知識それ自体の批判がとくに濃厚にあらわれている。

許征帆(1927-)は、1950年に華北大学のマルクス=レーニン主義研究室を卒業する以前から、マラヤ、シンガポールで中国共産党の指導でさまざまな政治活動を行っていた。1949年に香港から北京に戻った後は、1950年に中国人民大学マルクス=レーニン主義基礎研究室の研究生となって以後、同大学でマルクス主義理論教育研究所所長、マルクス主義理論教師選修学院院长を務めた<sup>(17)</sup>。

主要な著書には、『ソ連の第1期5か年計画』(1954)、『過渡期の階級闘争に関するレーニンの学説』(1956)、『マルクス主義学説史』(三卷本、主編、1987)、『マルクス主義と当代』(1987)、『マルクス主義辞典』(1987)、『実践中の社会主義をどのように認識するか』(1990)、『時代風雲変幻中のマルクス主義』(1996)、『社会主義論文庫』(三卷本、1998)などがある<sup>(18)</sup>。

## お わ り に

本論集の前号(「百花斉放・百家争鳴期の社会学者の発言に対する反右派闘争での批判

(1)」、74号)で、4人の論考(郭沫若、胡繩、賀致平、孫本文)を取りあげたが、社会学者の発言に対する批判のコンテクスおよびその内容はここで取りあげた4人の論考とまったく同じであるので、前号の「おわりに」に譲り、ここでは割愛したい。

しかし、留意すべきことは、批判者と被批判者のいずれにとっても百家争鳴とそれに続く反右派闘争という二つの大きな政治運動のもとでの言行であるということである。

〔注〕(注はすべて筆者星によるものである)

- (1) 馬寅初の新人口論について、李競能および若林敬子は次のように説明している。李競能は「(新人口論は)中国の人口問題が非常に深刻であり、もし『継続的に無制限に増加すれば、社会主義工業化および生産力の発展の障害となるだろうと明確に指摘している。馬は中国の人口問題の現在の問題について次のように述べている。すなわち、『人口が多く、資金は少ない』、人口増加は非常に速いが、資金の蓄積は非常にゆっくりである。人口増加と生産設備の不足の矛盾がある、労働生産率の向上の矛盾、工業原料の増産の矛盾、食糧増産・就業・教育事業の発展、科学技術レベルと生活レベルなどの向上との矛盾がある。人口が多いことはむしろ非常に大きな資源であるが、しかし非常に大きな負担にもなる。上述した矛盾を解決する根本的な道筋は、生産を発展させるほかに、『方法は人口の質を高め、人口の数を抑制することである』。このためには、出産問題の封建思想を批判し、避妊を広く宣伝し、多くの大衆がすべて産児制限の必要性和重要性を知らなければならないし、また産児制限の方法を実際に応用できなければならない。人口センサスを定期的に実施し、人口の実際の状況を理解しなければならない。晩婚を奨励し、行政と経済措置を採用して産児制限を進めなければならない、少なく生んだばあいは報賞し、多く生んだばあいは重税を徴収する。……」という(李競能, 1991, 「馬寅初」, 中国大百科全書出版社編纂部編, 『中国大百科全書-社会学-』, 中国大百科全書出版社, pp.188-189)。若林敬子は「馬によれば、年率2%以上の人口増加は経済発展を妨げるものであり、1) 全国人口調査と人口動態統計を実施し、人口政策の確立と第3次五ヵ年計画への織り込みを行なう、2) 農民大衆への産児制限の重要性を知らせ、男25歳・女23歳程度の晩婚が妥当とする、3) 避妊の普及宣伝を行ない、中絶は絶対に避けなければならない、という3点を提案した」という(若林敬子, 1999, 「『新人口論』批判」, 天児慧ほか編, 『岩波 現代中国事典』, 岩波書店, p.568)
- (2) 北京大学社会科学学部社会学系の学人傳略「馬寅初」のサイト (<http://www.shehui.pku.edu.cn/>) ほかから引用。
- (3) 中国国家図書館のサイト (<http://find.nlc.cn/search/doSearch?query=馬寅初>) ほかから引用。
- (4) 帝国主義、封建地主階級、官僚資本主義の三つを指す。
- (5) 差序格局とは費孝通が『郷土中国』(1947)のなかで郷土社会とともに、いずれも理念型として提起した概念である。いずれも、費の具体的・経験的な農村調査から帰納された概念であり、中国の伝統的農村の基層にあるのが、郷土性でそこから生まれたのが差序格局である。伝統的農村社会での社会構造は、個人のネットワークから成り立っており、このネットワークは同心円状に広がっている。その広がり方は「序(序列)」にしたがって、「差(格差)」が生じるといい、水面に石を投げた時に広がる水紋に喩えられる。費はこの社会構造の基本的特性を差序格局と名付けて、西洋の集団は成員資格が言明されており輪郭がはっきりしていることとの違いを述べている。

鈴木栄太郎は『日本農村社会学原理』(1940)のなかで、「従来の欧米の社会学は、個人と其自由を著しく高く評価する生活態度を持する事多き欧米の主として都市の生活の理解に最もよく適応する問題と方法を含んで居る。……然し個人の生活原理が家とか村とかに云ふが如き社会形象に依って規定されるところ多き我が国の特に農村の社会生活の理解には、……家とか村とかに関する事

項がここでは最も主要な問題となり、又其れに応ずる方法が必要である」(序 p.2) と述べ、第2次社会地区(自然村) およびそれを支える村の精神、その精神の永続性を述べている(第5章第5節 自然村の社会的統一性の根拠としての精神)。この鈴木と費の学説の相違については、筆者の今後の課題にしたい。

- (6) 孫本文の民国期と新中国樹立期における社会学に対する考え方の違いおよびその通底性については、筆者はかつて述べたことがある(星明, 2021, 「著名社会学者孫本文の二つの社会学観の通底性について—民国期から新中国成立期まで—」, 『中国社会学史の研究』所収, 一粒書房, pp.95-117)
- (7) 北京大学社会科学学部社会学系の学人傳略「林耀華」のサイト (<http://www.shehui.pku.edu.cn/>) ほかから引用。
- (8) 童養媳制度は、中国で古くに行われた婚姻様式で、男女ともに幼児のうちに将来結婚する相手が決められ、幼女を婿になる男児の家庭が買い取って養育し、成人後に買い取った家庭の息子と正式に婚姻させるという制度である。幼女は買われた家族の労働力と家の存続の役割を担う。娘を比較的裕福な家庭などに売り渡すことで養育に関する経済的負担を軽減し、他方で買い取った家庭でも婚姻に関する出費を抑えることが可能なうえ、新たな労働力を期待できると双方の家庭にとって利益があった (<https://zh.wikipedia.org/wiki/童養媳>ほかから引用)。
- (9) 1957年3月24日に、費孝通が人民日報に掲載した「知識分子的早春天気」(知識人の早春の気候) でかれは百家争鳴期の知識人の心情を鮮明かつ詳細に説明した。端的にいうと、党主導の百家争鳴に準じて意見を述べるべきか、あるいはそれは慎重にするべきかというジレンマにある知識人の心情に迫っている。当然ながら、この記事は全国の知識人界に広範な関心を引き起こした。周恩来は、この費孝通の記事を読んで、称賛し「費孝通氏の記事『知識分子的早春天気』は知識人の心の奥底にある考えをすべて語っている。共産党にも文章を書くことができる少なからずのひとがいる。しかし、そのような文章を書くことはできないと思うし、そのような考えをもって書くことはないだろう」と述べている。周のことは劉友梅の「費孝通：堅守知識分子風骨與情懷」(<https://sghexport.shobserver.com/html/baijiahao/2020/12/01/306979.html>) から引用。
- (10) <https://baike.baidu.com/item/周叔蓮> ほかから引用。
- (11) 中国国家図書館のサイト (<http://www.nlc.cn/ind.nlc.cn/search/doSearch?query=周叔蓮>) ほかから引用。
- (12) 中国社会学会は誤りで、実際は1929年10月28日に創立された東南社会学会のことである(この東南社会学会は上海および南京在住の社会学者よって組織された)。その後、東南社会学会は、1930年2月8日に全国規模の中国社会学社に改編された。なお、中国社会学会は1922年2月に余天休によって、北京で創立された中国で最初の社会学の学会である。
- (13) 章伯鈞が1957年5月22日の人民日報で設立を提唱した「政治設計院」を指す。これについて、北村実は「……章伯鈞は、共産党から指導権を奪いとるために『政治設計院』の樹立を提起したと批判されるが、事実は憲法上に規定されている政治協商会議、人民代表大会、民主党派、人民団体の意見を政策に反映させるよう提言しただけであり、このようにすれば共産党の独走による失敗を防ぐことができると述べたのである」という(北村実, 1982, 「反右派闘争について」, 『ふびと』39号, 三重大学歴史教室, p.28)
- (14) 羅隆基が1957年5月22日の人民日報で設置を提唱した「平反委員会」を指す。これについて、北村実は「……羅隆基にしても、共産党の性急な指導による急激な社会主義化が不可能であると提言し、行政組織の各部門に実質的な責任をもたせて政策遂行について討論させるよう求めただけであった」という(北村実, 1982, 同上, p.28)
- (15) 吳景超「社会学在新中国還有地位嗎?」『新建設』(月刊), 1957年1月号。この「社会学在新中国還有地位嗎?」は、1年後に『反对資産階級社会科学復讐』(第2輯, 中国科学院招開的社会科学

百花齊放・百家争鳴期の社会学者の発言に対する反右派闘争での批判 (2) (星 明)

界反右派斗争座談会發言集), 1958, 中国科学院招開的社会科学界反右派斗争座談会發言集, 科学出版社, pp.765-766 に再録されている (星明, 2021, 前掲書, pp.131-132 に訳出しているので参照されたい)。

- (16) 科学出版社編輯部, 1958, 「社会学工作準備委員会第 1 回会議」, 前掲書, pp.767-772 に再録されている。この会議は陳達が主催し, 費孝通, 雷潔瓊, 吳景超, 李景漢, 吳文藻, 袁方が出席した (星明, 2021, 前掲書, pp.136-142 に会議録の全文を訳出しているので参照されたい)。吳景超の発言内容は, この会議の議事録によれば次のようである。「1. 社会学会を設立する。2. 北京, 上海, 広州, 成都の 4 地域に社会学部を設置すれば, 過去の人材をうまく按配できる。3. 科学院に社会調査研究所を設置し, まず人口から着手する。4. 人民大学は条件が整っているのので, 理論, 社会調査, 人口と労働, 家族, 都市, ソーシャル・ワークなどは 2-3 年の準備があればすぐにできる。学生の進路: 市政府, 裁判所, 中華全国婦女連合会, 内務部, 労働部, 労働組合」である (星明, 2021, 前掲書, p.139)
- (17) <https://baike.baidu.hk/item/> 許征帆ほかから引用。
- (18) 上海図書館の目録 (<http://ipac.library.sh.cn/ipac> 20/) ほかから引用。

〔謝辞〕 この小論の翻訳部分については, 城西国際大学の姜寅星先生と李穎清先生のお二人から多くの助言と指摘をいただいた。記して, 深く感謝申し上げます。

(ほし あきら 佛教大学名誉教授)  
2022 年 3 月 30 日受理